
闇色の二重奏

まーや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇色の二重奏

【Nコード】

N0544X

【作者名】

まーや

【あらすじ】

望んだのは平穏で平凡な一生だった。夢は小学校の教師になること。それなのに気が付いたら全く知らない場所で、目の前には金髪碧眼美女が一人。しかも僕の母親と来た。いやいやいや。僕の名前は【橋本誠也】で決して【ダット】なんて名前ではなくて 唐突に異世界に放り込まれ、混乱する青年(?)の成長記。一人称で不定期更新。

いきなりな急展開

頭の周囲、で脈が打っている感覚というのがわかるだろうか。

よくよく考えてみると気持ちが悪いが、こめかみの辺りがピクピクする状態によく似ている。それに合わせて頭が痛い、と後頭部をさすればこぶが出来ていた。

そりゃそうだ。

なんとたつて、僕の背中には堅い床。

理由は推して知るべし。

当然転けて頭を打ったからという簡単に単純なことだった。

そして。

「やだ、ちよつ。大丈夫？」

僕をのぞき込むのは金髪碧眼美女。

お互いの息が触れ合う程度の距離に顔をつき合わせている。しかも、彼女が僕の上に被さった状態で。

うわあ。何この状態とか思っていたら、何気なくヤバイ状態なことに気がついた。

彼女のワンピースの隙間から微妙に胸の谷間が見えている。

かなり唐突ではあったけれど、これって男としては鼻の下を伸ばしてもオツケーなシチュエーション。だよな。

更に言えば、フラグっばいよな。これ。

しかし生憎とマジマジと見て頬を平手で叩かれるなんて趣味はないので。

「えー。ヘイキなので。とりあえず僕の上からどいて頂けませんでしょうか？」

とりあえず、そこから視線を逸らせて紳士的対応にしてみました。まあ、こんな美女に対してぶしつけに胸の谷間見てました。なん

てとても格好がいいとは思えないし。

あ、でもちらっと見えたな。でも、バレたら印象悪くなりそうなのでそうならないようスルーする選択を取る。

「あれ？」

なんでか不思議そうな顔されたけど。

「どうして敬語なの？」

あれ、それが原因？ って、いいからとりあえず退いて欲しい。とお願いしたらすんなり退いてくれた。

よし。これでひとまず大丈夫、と。

では、改めて状況確認しようか。

体を起こして立ち上がる。とりあえず一番痛いのは頭痛。疼いているという感じに痛い。あとは……うん。お尻とか背中もちょっと痛い。

多分受け身も取れないままがつり倒れてしまったんだろう。

先程の状態から見ておそらく僕は彼女にぶつかり、そして押し倒された。と。

うん。なんていうかダブルで美味しいシチュエーションだったよ。うだ。

まあ、その分体のダメージも大きかったようだけど。

そんなことを考えていると。

「ねえ、大丈夫？ やっぱり頭打ったところが痛むの？」

本気で心配そうな顔をして腰を屈める金髪碧眼美女がいた。

おっと。うっかり思考の世界に行きかけていた。

「あ、大丈夫です」

僕は金髪碧眼美女を見上げて……ん？

見上げて？

あれ。なんかおかしい。

頭の中で、警鐘が鳴る。というのはこういうことを指すんだろうか。

違和感にふと周囲を眺めて、僕は肩の辺りにあるテーブルに気が

付いた。そのテーブルはかなり大きく、備え付けてある椅子もまたそれに合わせて大きい。

そう。僕を見つめる金髪碧眼美女がぴったり丁度と思える大きさで。

「なにこれ、巨人の国？」

思わず洩らしたのはどこかのおとぎ話を思い出したからだったが。

「ちよつ。ダット!？」

金髪碧眼美女は蒼白になった。

あれ。ちよつと待って。僕なにかした？

「や、やっぱりさつき頭売ったのが原因なのかしら。ど、どうしましょう。お医者様？　そう。お医者様呼ばないと駄目かしら？」

なにやら慌ただしくなって参りましたが、彼女がどうしてそんなに慌てるのかさっぱりです。

多分おそらく、いや、絶対。僕に原因があることは間違いないけど。

いや、それにしても妙だ。

どうしてこの金髪碧眼美女はこんなにも僕のことを気にかけるんだろう。

他人なのに。

「い、いえ。まずあの人に言うべきなのかしら。ああああ、どうしたらっ」

「あの」

控えめに声をかけてみる。が、聞こえていない様子。

仕方がないので、蒼白になった頭を抱えてオロオロしたじめた金髪碧眼美女のワンピース。その裾を引っ張ってみた。

「あーのー」

少し大きめの声で。

そうしたらようやく彼女は気が付いたみたいで、僕の方を向いてくれた。少し涙目になっているのがいたたまれないけど。

でも疑問をちゃんと明らかにするのが先だ。

けど、思えばこのときも少し考えて発言するべきだったのかもしれない。
それでも、このときはこれしか考えられなかったんだから仕方ない。

「お姉さん、誰？」

ええ、浅はかでした。よもやそうなるとは思ってもみませんでした。

完全なる予想外の展開が僕を待っていた。

結論から言つと。

お医者様と呼ばれました。

さらに。

「はい、君の名前は？」

「橋本誠也」

「年は？」

「二十歳」

「出身地は？」

「……日本だけど」

白衣は着ていないけど、医者らしい中年の小父さんにごく当たり前の質問をされたので返答したら、金髪碧眼美女に泣かれました。

泣かれる覚ええないのに、どうしよう。

その考えが間違いだとは、今の僕には知りようがなかった。

状況整理

ぶっちゃけて言っと。

一、どうも金髪碧眼美女は僕の母親らしいです。

二、でもって、僕は今十歳を迎えたばかり。

三、名前はダット。ダット・クリークス。

四、出身地はジードリクス王国のカーライルという町。ちなみに今いるのもココ。

五、ってことはここは日本ではないわけで、じゃあ何処だっけ？
とになるわけですが。

六、……………ここ何処？

それを言ったら、また金髪碧眼美女に泣かれることになるから言わないけど。

でも、僕だっけって混乱中だ。

気が付いたら金髪碧眼美女と一緒に床に倒れてたみたいだし、なんでか周りの物は全部大きいし、よくよく見たら全然全く知らない場所だし。

「うーん。記憶喪失、だと思っんですけどね」

そう言っただけで唸っているのは僕を見てくれた医者だった。

「全く違う人間だと言われたのは初めてですよ。ええ。本当に。普

通は名前も年齢もわからない状態のはずなんですが……」

うん。その意見には賛成だよ。お医者様。

普通の記憶喪失ならね。

でも、僕の場合はおそらく違う。

自分でもよくわからないけど、おかしいとは思っけれど、自分の顔を手鏡で見せられれば、そこまでされればわかってしまう。

髪の色こそ黒だが、顔たちは正に金髪碧眼美女を幼くしたようなあどけなさを宿した少年そのもの。

平凡な黒髪黒目は一体何処へ行ってしまったのか。

というぐらいの変わりようだった。

もちろん声だって変声期前の子どもなわけで。

つまりこれは。

「生まれ変わったとか、そういうオチ？」

それともどっかの少年に取り憑いて体でも奪ったか。

うん。後者だったら物凄い罪悪感ありまくりだ。

っていうか、僕、それだと死んだことになるのでは……？

「いやいや待て待て」

頭を振って考え直す。

そもそもどうしてこうなった？

僕はこの場所にいるという自覚が出来る前はどこにいたのだろうか。

まずはそこからだ。

ということ、こうなる前の記憶を引っ張り出すことにした。

まず、僕の名前は橋本誠也。年は二十歳。職業は大学生。

要するに、学生だったわけだけ。

将来の夢は小学校教師。

地味で、平凡で、当たり前前の生活がしたいと望んでいた。

他の連中は逆玉で金持ちになる海外でスロット当ててやるとか、冗談風味にでかい口叩いてたけど、就職が世知辛いこのご時世。そんなギャンブルめいた危ういことをする勇氣も志も持たない僕には遠い話だった。

それを「意気地なし」だの「タマなし」だの揶揄されることもあったけど、それなりに楽しい学生生活を送っていた。

まあ、大学行く条件に学費の半分は自分で出す。って約束してたからバイトもいろいろしてたけど。

そこそこ充実した毎日だったんじゃないかと思う。

そう。至って平凡な大学生活をしていたはずだったんだけど。

「お、いたいた。よう。橋本」

講義終了後にやってきたのは、今時のピアスやらファッションに身を包んだ女子からも人気の高い男。

名前は神谷修平。

いくつか僕と同じ講義を取っていて、隣に座ることも少なくない。今のところは友人未満のよく話をする知人である。

その容姿のごとくちゃらんぽらんに見えるが、実は結構真面目で講義をさぼっているのを見たことがない。のに、遊びにも手を抜かない器用な男。というのが僕から見た彼の評価だ。

「あ、神谷。どした？」

気が付けば毎回違う女子が隣にいる。そんな彼に相応しく今日も今日とて見知らぬ女子が一人側に立っていた。

今日日珍しく髪を染めていない黒髪女子である。しかも、今まで神谷というこの男が連れ歩いてきたコンサバ系統の女子ではない。

「宗旨替えした？」

思わずそう問いを発してしまうほど、彼の好みには見えなかった。全身を黒で埋め尽くし、おおよそ地味めな独自ファッション。顔は美人だが、ちょっと目がきつい。

うーん。黒でゴシッククロリータだったか。

そんな連中がうつうつしているのは見たことあるが、その辺とはまた一線を画した雰囲気がある女子だ。

「あー、違う違う。この人は法学部の伏見先輩。お前に用があるんだと」

「僕？」

先輩で、僕に用とは一体なんだ。

まさか告白？

いや待て。

僕は彼女を知らない。というかここで期待はいかんだろう。

意識して実は違いましたじゃ、痛い。痛すぎる。

「じゃ、紹介終了。ってことで。オレはお暇する。後で成果を報告しろよー」

神谷の方はどこかおもしろがってさっさと退場。

アイツ、今度合ったらシメテヤル。

結局残されたのは僕とその伏見先輩という女子だけ……ではない。現在の場所は講義終了後の教室である。当然周囲には人の目が。

流石にここで告白とかはないはずだ。よほどの物好きなら別だけど。とか考えていると伏見先輩が僕がいる方向に動いた。

「やっぱり、あなただわ」

切れ長の瞳が僕を捉える。

正直に言っただろうか。

僕も彼女と同じ目の色のはずなんだけど、異様に怖い。なんでかわからないけど、ホントに。マジで。

目が据わっているわけでもない、楽しんでるわけでもない。あえて言うなら、他の奴らにあるような感情が見えないと言っべきか。そんな彼女の目に捉えられて動けない僕の目の前に伏見先輩は立つ。

そして。

「気をつけて。あなた、さらわれるかも」

予想外の言葉は発せられた。

「特に雨の日は危険。出かけない方が身のためよ」
あまりにも唐突すぎてその後は声が出なかった。
というか、なにそれ。

予測の範疇にない斜め上の《告白》は状況を飲み込もうと混乱する以外、僕の全ての反応を奪った。

「じゃあ、忠告はしたわ。無駄かもしれないけど」

用は済んだ。とばかりに僕に背を向けると去っていく先輩。

呼び止め、問いかける間もない。

「……何アレ」

とりあえず、周囲の講義仲間に問いかけてみたけれど。

「俺らが知るわけないじゃん」

はい。その通り。

だけど、後になって思えばこれがきっかけというか原因だったんではなからうか。

僕の記憶が途切れているのはこの翌日。

彼女が言う雨が降った日だった。

天気予報

奇妙な先輩に出会った翌日の天気予報は曇り。

ちなみに降水確率は午前中は三十パーセント。午後は五十パーセント。

家を出るときに「傘を持っていきなさい」と母親に持たされたわけだけでも、僕の心境は複雑だった。

家を出て空を見上げる。

雲は多いが、晴れ間も見える六月独特の天気だろう。要は梅雨。

今日の講義は教授のご都合で午前中のみ。

例の先輩に言われたからというか、なんというか。気分的に行きたくない状態だったが、学業は疎かにしないと密かに立てた誓いもある。

伊達に小学校、中学校、高校と皆勤賞を取ってきたわけじゃない。それにここまでこう来ると大学もやってやるう、って気にならないだろうか。

目指せ、大学も皆勤賞！

……うん。こう、流れるにね。

ともかく、現状大学を休むという行為をするつもりはなかったし、夕方にはバイトが入っているし、家を出ないわけにはいかない。

それに、午前中ぐらいは雨大丈夫っぽかったし。

っていうか、なんで僕あの先輩の言うこと気にしてるんだろう。

「いやいや、あんないきなりオカルトっぽい電波な話……」
実際にあるわけない。

あの先輩の目は怖かったけど。

そんなわけで、大学に行つて、講義を受けて、午後は適当に時間

を潰して、夕方にバイトに行つて。
その間、雨は降りませんでした。

おしまい。

ああ。ホントにこれでおしまいだったら、よかった。
よかったんだけど、そうはならない。

ならなかったからこそ、僕は奇妙なことになったわけで。
雨はバイトの後にやってきた。

「土砂降り……」

朝から晩まで降るはずだった量が全部一度にやってきたんじゃないか……？　と思えるほどに大きな雨粒が凄い音を立てて降り注いでいる。

正直、ビニールハウスとか穴が空いてもおかしくないんじゃないかってくらいに。
その証拠に。

傘を差して一歩外に出た途端、その重量が二倍以上に増えた。

普通なら「トントントン」程度の雨音なのに今は「ドドドドドドド」とまるで滝のような音がする。

雷も光つては鳴り、光つては鳴り。

昔、光ってから三秒以内に音がしたら物凄い近い証拠だって聞いた気がするけど……うん。

空気がビリビリと震えてるし轟音だから耳も痛い。

しかも光ってからいつ鳴るかわからないわけで、構えていてもドキリとする。

いや、別に怖いとかそういうわけじゃないけど。

いつ来るかわからない驚きというのが厄介っただけ。

しかも、気温のせいなのか歩く場所歩く場所モヤだらけ。

視界が悪すぎる。

この状態で歩くのは危険だろう。ということとで近くのコンビニに。

横断歩道も目の前で足早に駆け抜けて……滑った。
しかも道路の真ん中で。

頭に物凄い衝撃を受けたのは覚えている。

実のところそれが最後の記憶であり、現在に繋がる記憶、だった
りした。

「うあー」

ベッドの上で悶える。

なんとも情けない最期ではなかるうか。

いや、あれで本当に死んだのなら。という注釈がつくけども。

この状態を見るに、あの伏見先輩の言ったことが見事に的中した
っぽい。

微妙に違うけど。

それともあれはただの偶然だったのか。

「ダット」

金髪碧眼美女がそんな僕を戸惑いながら見つめている。

あ、ヤバイ。泣きそうな顔だ。

「えっと。よくわからないんですけど。あなたが僕のお母さん？」

「……っ！」

あ、泣いた。

「どうしてこんなことにつ。ああつ。でもわたしが悪いんだわ。慌
ててたから、ダットが部屋に入ってきてたことにも気付かずにつ
かってっ！ ごめんなさいダット！」

大泣きして、ベッドの上の僕にしがみつく。

っつか、痛い。イタ、痛いっば！

この人、凄く力が強い。

胸の辺りが彼女の腕で見事に締め付けられて息が出来ない。

「ちよ、はなし……」

死ぬ。死ぬ。息がっ。

「あー、コホン。おかあさん。息子さんが苦しがっていますので、その辺りで」

ありがとうございます。お医者様。

あなたのおかげで死なずにすみました。

肩を叩かれた金髪碧眼美女ははっと我に返って離れてくれた。

「えー、とりあえず。記憶がない以外は特に問題ないようですね。

まあ、記憶がおかしいというのは……まだ頭を打ったばかりですから混乱しているだけかもしれないし。何日か様子を見てみましょう。時間の経過で記憶が戻る場合もありますし」

「ほ、本当ですか？」

「ええ。もちろんこのままという場合もあり得ますが」

金髪碧眼美女の目に再び涙が浮かぶ。

いや、まあ。なんとなく気持ちはわかるけど、対応に困るのでとりあえず泣くのは止めてもらいたい。

「痛み止めの薬は処方しますので、ひとまずそれで経過を。あとは……そうですね。普段と同じ生活をさせてあげてください。ふとしたことでも何か思い出すきっかけになるでしょうから」

「はい、わかりました。ありがとうございます」

その会話を最後に医者が色々と道具を片づけて出て行く。

金髪碧眼美女もそれを追ったので、現在部屋には自分一人きり。

「……………はー。なんじゃこれー」

未だに痛む頭を抱えて唸る。

どう考えても普通じゃない。

自分の部屋だと言われて連れてこられたこの場所。子供用のベッドとか勉強机つぼいのとかいろいろあるけど、どう考えても【橋本誠也】のものではない。

そして、ベッドが置いてある場所から見える窓の外も見慣れた四

角いビルなど存在しない。

あるのはいつかテレビの旅番組で見たようなヨーロッパで見かける風景に酷似していて、まるでどこぞのテーマパークのようだ。

「わけがわからん」

なにがどうしてこうなったのか。

いや、多分原因はあの雨の日にすつころんで頭を打ったからなんだろうが。

なにをどうしたら自分は十歳で、ダット・クリークスなんて別人になっっているのか。

しかも聞いたことない国で、町で、服を見てみたら完全に昔風味。これで混乱するなという方が無理というもの。

僕、これからどうなるんでしょうか。

誰ともなしに、いきなり放り出された場所に問いかける。

今はそれしか出来ないのが少し寂しくて悲しかった。

驚きはまだ続く

実のところ。

僕が気が付いていないだけで、あとでびっくりすることがまだいくつかりました。

中でも、なぜ最初に気付かなかったのかと思ったのは言葉。

普通に聞いて普通に喋って、それで理解できていたから全然まったく気が付いてなかったんだけど、実は金髪碧眼美女とか僕が喋っていたのは日本語じゃなかった。

金髪碧眼美女で日本語が流暢に喋れるとか、そんな人間が早々いるはずもない。

それに気が付いたのは、僕がというかダットが読んでいたらしい本を見せられた時。

それこそ文字通り、目が点になった。

漢字でもなく、ひらがなでもなく、カタカナでもなく、アルファベットでもない。

強いて言うなら……：ハングル語？ を崩してさらに細かくしたような字が書いてあった。

うーん。わかりづらいか。

例を出すなら、中国の簡略化した漢字を日本の漢字に変換した。とでも言えばいいのか。

ともかくそんな感じで、文法は英語に近い。

完全に見たことない文字だが、しっかりと脳内で読めているのはたぶんこの体がそれを覚えているからなのだと思う。

しかし、それ以上に困惑したのは読んだ本のタイトルだった。

「《魔法基礎読本》」

物凄く嘘くさいと思ったのは僕だけだろうか。

魔法なんて代物は空想の世界の産物だってことは常識。

子供向けに絵でわかりやすく説明されていて読み物としては面白かったけど……とりあえず、適当に目を通してその辺に放置。

何かを期待する目でお母様に見られましたが。ええ、何もありませんとも。

そのあと涙目になってたけどね。

ああ、そうだ。

母親がいるっていうことは、父親もいるっていうことで。

僕、ダットが頭を打って記憶喪失になったという知らせを受けて家に帰ってきた彼は、厳つい顔で、何故か鎧つばいものに身を包んだ熊みたいなお黒髪の大男。

それを見た瞬間凍り付くしかなかった僕は、肩を掴まれ。

「ダット。父さんだ。わかるか？」

ひげ面の彼に迫られました。

厳つい顔にひげ面は、かなり迫力がある。まさに泣く子も黙るかという状態。

いや、でも知らないものは知らないわけで。

「わかりません」

素直に言ったらこの人にも泣かれました。

泣する大男なんて怖すぎる。つか引く。

まあ、原因は言わずもがな僕なわけだけど。罪悪感もあるんだけど。でもここで嘘付くわけにもいかないし。

とか思ったら金髪碧眼美女も混ざって泣き始めた。

流石に何か言わなきゃ、と思って「ごめん」って謝っただけど。これが失敗だった。

感極まった二人に同時に抱きすくめられて体がみしりと軋みましたよ。ええ。軽く意識が遠退いたとも。

二人とも力が強すぎる。殺す気が。

それはさておき。

新しい情報も含め、もう一度現状を把握するために整理する。
まず、僕の名前はダット・クリークス。
どうにも泣き上戸っぽい金髪碧眼美女が母親で名前はキーラ。

敵めしいひげ面の大男が父親のガリオ。

母親の方は専業主婦で、父親の方は聞いたら町の自警団の副団長
だった。

「自警団ってなに？」

と思わず聞いたら、それも忘れたのかと意気消沈されたが一応説明してくれた。

その内容は、少しばかり信じがたいものだったけど。

「自警団ってのはな。町を守る雄志の集まりだ。仕事は町の治安を維持することと、町の外にいる凶暴な魔物から町を守ること」

うん。前半は納得した。

けど後半部分の魔物って何だ魔物って。

「何！？ 魔物のことも忘れたのか？」

すみません。忘れたんじゃないかと、わからないんです。とは流石に言えない。

「魔物はな、危険なんだ。人間が自分の縄張りにやっつけてくりゃ、容赦なく襲う。逆に言えば、縄張りにさえ入らなきゃ安全ってことになるんだが一概にそうとは言えねえ。はぐれたり、食料がなかったりすりゃ、人間の住む場所にやってきて人間も襲う。魔物ってのはそういうやつらだ。姿形もいろいろでな。地を駆ける奴もいれば、空を飛ぶ奴もいる。水の中にもいるらしいが……オレは見たことがねえ。普通の人間にゃ、相手は無理だ。ちゃんと鍛えた奴か、魔法使える奴が何人かで組んでやらねえと死人が出る。中には一人でやる奴もいるが、まあそりゃ特別な人間だな」

えーと。

まとめるとつまり、ここは見た目通り日本ではあり得ないわけで。

しかも地球と基本的な部分が違っていて。

日本で言うならいわゆるファンタジー系なアレってことで。

おまけに魔法という言葉まで話に出てきたということは、放置した例の《魔法基礎読本》は実際に役に立つ代物だった、と。

なんかゲームとかでよくある展開になってきた気がする。

「うわぁ」

そう考えたらちょっと鳥肌が立った。

もちろんあり得ないだろ、という方向で。

いや、心も少しは躍ったけどね。

それでも平凡で平穏な日々を満喫したがっていた人間としては勘弁してください、な展開だ。

かといって自分の身を顧みれば、すでにそれが回避できる状況でもないのは明らか。

「つまりはここで生きていくしかない、と」

僕の容姿はすでに【橋本誠也】ではあり得ない。

目の前で心配そうな顔つきの両親の子供。【ダット】でしかないわけで。

未だ納得いかない部分はあるものの、そういうもののだと受け入れなくては生きていけそうになかった。

ただ、この二人にはなんだか申し訳がないような気がしてならな
いけれど。

「なんとなくわかった、かな」

「そ、そう？」

「二人がお父さんとお母さんで、僕がその子供。お母さんは専業主婦で、お父さんは自警団の副団長。町の外は危険な魔物がたくさんいる」

まずは、ここまでわかればなんとかなる。

あとは徐々に色々覚えていけば、この世界でも生きていけるだろう。

そのための努力は多分必要だけど。

でもその前に。

「ダッター！」

「ちゃんと思いで出してね」

どうやらこの両親には抱きつき癖があるらしい。

これを改めてもらわなければ、知識を得る前に死にそうだった。

とんでもない一日だった。

転んで頭を打って目が覚めたら異世界なんて、漫画の世界だけだ
と想っていたことが実際に起こるなんて誰が思うものか。

僕自身が望んだ平穏で平凡な毎日がいきなり消え去ってしまうな
んて悲しすぎる。

だからせめて夢の中だけでは平穏で平凡であって欲しかった。
欲しかったんだけども。

「こんにちは」

どこに立っているのかわからないような真っ白な夢空間。
そこでの僕はちゃんと二十歳の【橋本誠也】で。けれど、目の前
には十歳の少しおっとり顔の【ダット】が立っていて。

「あれ？」

なんでこんなことに。

いや待て、整理しよう。

これは果たして本当に夢か。

「夢、だよ。ぼくらは眠ってる」
そうかそうか。

じゃあ、目の前にいるのは。

「ぼくはダット。おにいさんも、そう」

「いやいや。僕はちが……ん？」

あれ、今僕声に出してたかな。

「ううん。出してないよ。でも、ぼくはおにいさんと同じものだけ

ら。考えてることは全部わかる」

「うわあ。それってヤバイ。」

全部筒抜け。隠し事不可能。妄想も……いや駄目だな。相手は十歳。危険すぎる。」

「うん。でもどっちもぼくだからあんまり関係ない、かな」

それはそうかもしれないが、って。」

「待て待て待て」

今、聞き捨てならないことを聞いたような気がする。」

ダット少年よ。まず聞こう。」

「君は誰かな？」

「ダットだよ。正確には今のおにいさんが忘れてる、この世界に生まれついた【ダット】の十年間の記憶、だけど」

はい、爆弾発言来ました。」

っていつか待って。何ソレ。」

「……わからなくは、ないはずだけど」

ダット少年はきよとんと僕を見上げる。」

「おにいさんもなんとなく気が付いているはず」

「何を」

「だって、いろいろ考えてたでしょ。自分はその大雨の日に転んで死んで、生まれ変わったんじゃないのかとか、死んで違う世界の

【ダット】に憑依しちゃったんじゃないのか。って」

「あ……」

そう。確かにそれは考えた。」

本物のダットはどこへ行ったのか。もしかして追い出したのかもとか。

あまりにもオカルトじみた発想だけど、実際そうだとしたら本人にもその両親にも謝っても謝りきれない罪を犯したことになる。」

そりゃ罪悪感でいっぱいにもなるわー。」

しかし、目の前には【ダット】と名乗る少年がいて。」

「実はね。どっちも正解と言えば正解」

「……は!？」

二度目のトンデモ発言をしてくれた。

「本当に死んじゃったのかはぼくにはよくわからないけど、確かにぼくは生まれて十年間ここで過ごした。向こうの世界の記憶はなかったけど。でもね、ずっと違和感を感じてた。きっとそれがおにいさんだったんだね」

ダット少年はそう言って僕を指示す。

「どうしても、この世界が不自然に見えて仕方なかった。この世界は自分がいる場所じゃないって思ってた。お父さんとお母さんも好きだし、友だちだっているけど。でも自分だけ取り残されてる感じがして。疎外感っていうのかな。こういうの」

難しい言葉知ってるね。疎外感。十歳なのに。

思わず心の中で茶々を入れてしまったが、ダット少年見事に無視

あ、うん。疎外感感じたよ。今。

でも、ダット少年の次の言葉に遊んでいる場合ではないことに気付く。

「ずっとそう考えてきて、考えて続けて。そしたらこうなったんだ。わかる？」

彼が押さえたのは自分の後頭部。

その姿に、僕ははっと我に返った。

まさか。

「頭を打って、思い出した？」

「正解」

ダット少年が笑う。

「【橋本誠也】だった過去をね。それで思い出したんだ。でも打ち所が悪かったせいで【ダット】の十年間が飛んじやったみたい」

だからあの医者言う記憶喪失も正解なのだとダット少年は言う。

「それが、僕？」

「うん」

まさになんてこった。だ。

けれどこれで少し納得もいった。
つまり。

「最初に言ったように、ぼくはおにいさんと、おにいさんはぼく。ぼくは【橋本誠也】の記憶が戻ったことで違和感の理由がわかってすつきりしたし、多分おにいさんもどうして自分が【ダット】なのかこれではつきりしたんじゃない？」

……確かに、そういうことなら大部分の疑問が解消される。

が、それでも納得いかない部分についてはどうだろう。
例えば。

「ここ日本じゃないよな」

「うん。ここはジードリクス王国のカーライル。ニホンって国は聞いたことない」

「どう見ても生活水準が二十一世紀とは思えないんだけど」

「向こうにあったものはほとんどないって思った方がいいかも。キカイとか。その代わり魔法があるよ」

その時点で紛れもなく別世界判定チェック付けないと駄目よなあ。
やっぱり。

「魔物もいるし。その認識でいいと思う」

でも、僕が一番に疑問なのはソコじゃない。

「普通、生まれ変わるって言ったら同じ世界だろ」
そう。コレだ。

輪廻転生とかそういう話は、宗教というか、昔話というか、日本でも色々あるし珍しくない。

だけど、こんないきなり異世界で生まれ変わるとか思わない。

まあ、そもそもが普通こんな記憶があって生まれ変わってるとかいう自体があり得ない状態なんだけどさ。

「受け容れられないって思ってる？」

ダット少年が少し困った顔で僕を見上げる。

う、そんな悲しげな目で見るのはやめてほしい。

「な、納得いかないだけだよ。それだけだから気にするな」

っていつか、なんで僕。自分で自分を慰めるような真似しないといけないんだろう。

「でもそれ、明らかに拒否してるよね」

あ、突っ込まれた。

「やっぱり、向こうの世界の方がよかった？ 帰りたいの？」

「それ、未練があるかどうかってことか？」

「うん」

はつきり聞いてくるなあ。ダット少年。

「まあ、普通に平凡に生きられたら満足だっと思ってたし。その目標に達する前に死んだのはちょっと微妙」

せめて、彼女作って結婚して子供と遊ぶ……ぐらいのことはしたかった。

考えていることが筒抜けだから、ダット少年に呆れられたけど。

「ちよつとつていつか、未練がいつぱいあるみたいに見える。贅沢うるさい。それぐらい夢見てもいいだろうが。」

「……悪いとは言わないけど。でも死んでるから、意味ないね」

おい。何気なく発言に棘あるな。ダット少年。

「だって、今この世界で生きてるのはぼくだもの」

「う、そうだった」

言つまでもなく【橋本誠也】はすでに死んだ身。主導権が【ダット】にあるのは当然のことだと今さらながらに気が付いた。

ダット少年。僕が悪かった。

現状を否定するのは、自分を否定することに等しいとやっと気付く。

「でも、おにいさんもぼくだから。気持ちはずちやんとわかってる。

だから、おにいさんの希望通りにはいかないかもしれないけど。ぼくもちゃんとぼくが生きたいように生きるよ」

それが前世である僕へ向けて出来る唯一のことだから。

最後の言葉は口には出ていなかったけれど、ちゃんと伝わってきた。

まあ、ダット少年が言うように彼も僕だから出来る芸当なわけだ
けど。

「あ、そろそろ起きないと。おとうさんとおかあさんに心配かけすぎたから。あやまらなきゃ」

ダット少年が僕に向かって手を伸ばす。

「……そだな。僕、思いつきり失礼なこと言ったし」

誰、とか。敬語で喋るとか。

あれは正直あの時点でも泣かせすぎたとちょっと反省してる。

ここはやはり、きちんと謝らないといけない。

「行こうか」

僕の手が、差し出されたダット少年に触れ。

夢の世界は消失した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0544x/>

闇色の二重奏

2011年9月26日07時00分発行